



落

語教室生が五名になった。去年の九月に最初の塾生が来たときも本当にびっくりしたが、季節が一つ動いて五名になっているのにも驚くほかない。驚くことは他にもある。「稽古は公開します」と近所に告知して回ったら、何名か見に来てくださった。まあ案内ももらったからちよつと顔を出しておこうか、という義理堅い人たちがたまに来てくださったれば、ぐらいに考えていたのに、その後は絶えることなく、常連さんとご新規さんで毎回けつこうな賑わいである。開始の三十分以上前に来られる人もある。

「まだ、こどもが来るまで四十分もありますよ。」
「ああ、そげかいね。ほんなあここんとこで待たせてもらーわ。」

「そぎゃん寒とこで待たれんでも、あがつて下さい。ストーブもつけようけん。」

「家の鍵閉めて出てきたけん、また帰って開けらやもなし、ほんなああがらせてもらーかね。」

毎度毎度、この会話を繰り返す。きつとおばあさんが気が急いでならず、じつと家で待つよりは、と早いのを承知で出かけられるのだろう。ぼくもそう察せられる年齢になった。すでに同じ徴候を自覚している。

ほとんど定型となったこの会話を何だかいいなあ、といつも思う。耳が遠くなっている老人たちには、こ

どもたちの落語が全部は聞こえてないかもしれない。それでも稽古がある度に足を運ぶのは、ここに来ればこどもたちに会える、そんな行き先になったからなのだろう。

「この社会を安定的に持続させてゆくためには、社会の片隅にでもいいから、社会的共有資本としての共有地、誰のものでもないが、誰もが立ち入り耕すことのできる共有地があると、わたしたちの生活はずいぶん風通しの良いものになるのではないかと考えているのです。」(『共有地をつくる』平川克美／ミシマ社)

ぼくにはちよつと観念的すぎるけれど共感する。そして、さっきの繰り返される会話に、この共有地につながる道が見える気がする。

昨日二十一日は、市内某地区新年会のゲストに招かれ、五人がうちそろって高座に上がった。わずか十日足らずでの初舞台という子もいたが、稽古で緊張のあまり顔を上げることさえ臆していた子が、しつかり顔を上げて、大きな声を出していた。こどもはこういうことをしてのける。

きつと常連さんたちは、どんな出来映えだったか気にしていることだろう。「みんな最高の出来でした」と言うつもりだ。「いつも聞いてくれる皆さんのおかげです」も忘れず。

空き家 6

木幡智恵美

墓①

家のことを考える上で、切り離せないのが墓だ。松江の墓は公園墓地に、実家の墓は歩いてすぐの元屋敷跡にある。父の実家の墓も家の敷地続きのところ建っている。田舎の墓は、結構家の近くに建っていることが多い。

年の初めから墓のことを書くのは気が引けるが、年末に読んだ新聞に昨年度の墓じまい件数がこれまでの最高だったとあり、心の奥にくすぶっている思いが沸き出て来た。

墓の管理は大変だ。お盆前には汗にまみれ、蚊に刺されながら草取りをしたり墓石を磨いたり。うちは、盆や彼岸になると、松江の公園墓地に参つてから、出雲に向かう。出雲でお参りするのは四箇所だ。元屋敷跡にある実家の墓に参り、次に一キロ離れた父の里へ。家の近くの小高い砂の丘まで歩いて上がり、線香を供える。伯父の墓は曹洞宗の寺、伯母の墓は浄土真宗の寺と、全く違った方向にある寺の墓地にある。伯父の墓は、祖父である杉山家の墓標、祖父亡き後、母子ごつそり戻った元の姓である藤江家の墓標と二対並んで建っている。だから、花ノ木は計四束挿すことになる。伯母の墓は、伯母亡き後に、弟である伯父が建てた。墓の側に竹藪があり、ある時は墓石の横に三メートルくらいの竹が伸びていた。草がびつしり生える時、枯草に覆われる時、いずれも掃除が大変だ。伯父夫婦、伯母夫婦ともすでに他界し、子どもたちは遠方に居を構えていて、めつたに帰つてこない。だから、一時間あまりかかるとはいえ、地元に住る私が夫と参るしかないのだ。

遠方に居て墓参りが困難な人が増えているし、子や孫の代になると、墓に入っている人を知らない人が多くなる。そうになると、墓は忘れられ、墓じまいがどんどん増えていく。これからは墓を建てることさえ少なくなっていくだろう。実際我が家でも、子どもたちは親に付いて来なくなつてからほとんど墓参りをしていない。自分たちが居なくなつたら、伯父や伯母の墓と同じように、実家の墓の掃除をしたり、お参りをしたりする者が居なくなる。そう考えると、家と共に墓も足腰の立つうちに方を付けねばならないと思うのだ。

30代フリーター 自民党が裏金疑惑にまみれても、下野する気配すらない現在から見ると、2009年に政権交代が起きたのが不思議に思えてくる。

年金生活者 09年にそれが起きたのは、国家と国民の力関係が変わったからだ。国家の優位が減じ、そのぶん国民の優位が増した。民主党はその変化を「国民の生活が第一」と公約に表すことによって政権の奪取に成功した。

30代 なぜ力関係が変わったんだ。

年金 高度経済成長を経て消費支出に占める選択的消費の割合が必需的消費と肩を並べるまでに拡大した結果、国民は膨らんだ選択的消費を一齐に控えることによって、当面の生活に困ることなく、景気を停滞させ、時の政権を倒すことができるようになった。前世紀の終わりに吉本隆明はそう指摘した。それは国家の権力の一部が個人に分散したことを意味する。

分散した権力を手にした諸個人はそれに相応する処遇を求めるようになった。それは政府の都合よりも国民の都

年金 政権に返り咲いた自民党が、旧民主党の放り出した理念や政策の相当な部分を拾い上げて代行し、政権交代の理由を消し去ったからだ。

「国民の生活が第一」「官僚主導から政治主導へ」というスローガンを掲げながら、公約を公然と破り捨てるという民主党のオウンゴールに助けられて政権に復帰した自民党は、そこから教訓をくみ取った。①できない公約はしない②国民ファーストの姿勢をアピールする③「政治主導」を制度化する(内閣人事局の新設)といった形でそれを実行に移した。

そうなる、民主党を支持する理由はなくなる。それどころか、沖縄の普天間基地の移設や消費税の引き上げをめぐって露骨な公約破りをし、国民そつちのけで内紛を繰り広げたこの党には二度と政権についてほしくない、と国民は考えるようになった。その後身である立憲民主党の支持率が低迷しているのはその結果と言える。

30代 維新の会は立憲とは出自が異なる

合を優先しろという要求だった。それをいち早く察知したのが小泉純一郎だった。彼が郵政民営化のスローガンに掲げた「官から民へ」はその要求への回答だった。

30代 あのところは小泉人気が盛り上がり、政権交代など考えられなかった。

年金 彼のあとに続いた3代の自民党政権は、国家と国民の力関係の変化に気づいていなかった。その鈍感さに不満を募らせた国民は自民党ではダメだと考えるようになった。

それまでの自民党は国民の批判を浴びると、総裁の首をすげ替えて新しい内閣を組織する疑似政権交代でしのいできた。それは大昔の「王殺し」に似ている。災厄が起きると、王の力が衰えたためとして、王を殺害するシステムだ。国家と国民の力関係が新たなバージョンに入ったことで、王殺しの現代版である疑似政権交代の効果が薄れてきた。小泉後の短命な自民党政権はそれをあらわにした。

民主党は小泉政権の「官から民

るのに、政権をうかがうほど支持が広がっていない。官僚主導から政治主導への転換を目指すなど、政権交代時の民主党の公約と重なる部分が多いのに、それが党勢の飛躍につながっていない。

年金 そうした公約はすでに自民党が引き受けてしまっているからだ。

30代 だとしたら、政権交代は時代が大きく変化するときには起きないと

へ」を受け継ぎ、「官僚主導から政治主導へ」を掲げて政権を手にし

た。国民が自民党あるいは自民党的なものの完全排除を求めたのではないことをそれは示している。自民党1・0に代えて自民党2・0による政権を求めたと言ってもいい。政権についての民主党の代表の鳩山由紀夫も幹事長の小沢一郎もともに自民党出身者だったことがそれを物語っている。民主党は55年体制下の社会党とは異なり、自衛隊も日米同盟も市場経済も容認し、基本政策では自民党と大きな違いはなかった。

30代 大した違いがないのに、政権交代して意味があるのか。

年金 それでも政権交代はあったほうがいい。長期政権は惰性、停滞、腐敗を免れない。与党と野党がたとえ同じ政策を掲げていても、前者はその推進にブレーキをかけ、後者はそれを加速する可能性が高い。

30代 2009年には起きた政権交代が今なぜ起きないんだ。

いうことになる。

年金 米欧ではそうではない。政権交代は普段の出来事としてある。台湾もそう。今回の総統選では政権交代はなかったが、与党の民進黨は立法院で過半数を失った。部分的な政権交代、あるいは準政権交代とみなすことができる。

中国に飲み込まれるのを拒む一方で、相手を無用に刺激しないように警戒して、有権者はそれに最適な権力の構成を選んだと言いうことができる。権力にただ従うのではなく、それを自分たちのために利用しようとする台湾人の政治的なメンタリティーがうかがえる。

30代 少子高齢化は時代の大変動だろう。自民党政権はそれを乗り越える道を示せないでいるのに、それが政権交代に結びつかない。

年金 変化が起きてても、対処法を実行可能な公約として示せなければ、有権者をその気にさせることはできない。それをやれる野党が今ひとつもない。

ニュース日記 907
中村 礼治

政権交代はなぜ起きないのか